# 『源平盛衰記』西光地蔵建立譚の背景

松下健二

［キーワード　①源平盛衰記　②西光　③地蔵　④唱導］

## 一　はじめに

京都では毎年八月下旬の地蔵盆に、京都市内の六所の地蔵堂を巡拝する〈六地蔵巡り〉が行われる。〈六地蔵巡り〉の由来は、現在では、小野篁が冥界で目にした地蔵菩薩の尊容を模して造像した六体の地蔵像を、六所に分置したことが始まりとされている。この説は、中世に広く流布した「矢田地蔵縁起」の説を下敷きにして、寛文五年（一六六五）に木幡の大善寺が作った『山城州宇治郡六地蔵菩薩縁起』（以下、『六地蔵縁起』）によって広められたものである。[注1] しかし、〈六地蔵巡り〉のもう一つの淵源が『源平盛衰記』（以下、『盛衰記』）巻六「西光卒塔婆事」にあることは、早くから注目されていた。『盛衰記』では、鹿ヶ谷事件に関わった廉で拷問の末に惨殺される西光法師が、「廻リ地蔵」の開基とされているのである。以下に、全文を掲げる。[注2]

或人ノ云ケルハ、「今生ノ災害ハ過去ノ宿習ニ報ベシ。貴賤不レ免二其難一、僧俗同ク以テ在レ之。西光モ先世ノ業ニ依テコソ角ハ有ツラメドモ、後生ハ去トモ憑シキ方アリ。当初難レ有願ヲ発セリ。七道ノ辻ゴトニ六体ノ地蔵菩薩ヲ造奉リ、卒塔婆ノ上ニ道場ヲ構テ、大悲ノ尊像ヲ居奉リ、廻リ地蔵ト名テ七箇所ニ安置シテ云、『我在俗不信ノ身トシテ、朝暮世務ノ罪ヲ重ヌ。一期命終ノ刻ニ臨ン時ハ、八大奈落ノ底ニ入ランカ。生前ノ一善ナケレバ、没後ノ出要ニマドヘリ。所レ仰者今生後生ノ誓約ナリ。助レ今助レ後給ヘ。所レ憑者大慈大悲ノ本願也。与レ慈与レ悲給ヘ』トナリ。加様ニ発願シテ造立安置ス。四宮川原、木幡ノ里、造道、西七条、蓮台野、ミゾロ池、西坂本、是也。タトヒ今生ニコソ剣ノサキニ懸共、後生ハ定テ薩埵ノ済渡ニ預ラント、イト憑シ」トゾ申ケル。

眼目となるのは、傍線で記した「廻リ地蔵」の建立を示した箇所である。西光は京へと続く主要な七つの街道の辻ごとに六

体の地蔵像を造立し、「廻り地蔵」と名づけて安置した。そして、その場所を、四宮河原・木幡・鳥羽造道（つくりみち）・西七条・蓮台野・ミゾロ池・西坂本の七所であるとしている。一方、『六地蔵縁起』以降の〈六地蔵巡り〉では、四宮河原（徳林庵）・木幡（大善寺）・上鳥羽（浄禅寺）・下桂（地蔵寺）・常盤（源光寺）・ミゾロ池の六所が巡礼地として定着している（ミゾロ池の地蔵は明治初年に千本今出川の上善寺に移された）。西坂本は廃止され、西七条が下桂に、蓮台野が常盤に移動しているが、京都の〈六地蔵巡り〉が『盛衰記』をうけて成立したものであることは明らかである。

この説話に関しては、〈六地蔵巡り〉への関心から考察が加えられたものが多いが[注3]、浜畑圭吾氏は、この説話の生成について、西光の罪業と六地蔵造像の教理上の功徳の面から論じ、『平家物語』諸本の中でも『盛衰記』だけが西光の救済を図っているとし、後出の類話についても考察を加えている[注4]。

浜畑氏は『盛衰記』の文脈の中でこの説話の生成を論じているため、地蔵が安置された七所についての検討はなされていない。しかし、西光が地蔵を安置した七所は『盛衰記』の伝承圏を窺わせるものであり[注5]、『平家物語』諸本の中でも特異な位置にある『盛衰記』の独自性と、これらの場所性には密接な関係があると思われる。そのため、説話の生成を論じるうえでも七所の検討は不可欠であるだろう。本稿では、七所について改めて検討を加えたうえで、『盛衰記』と西光地蔵建立譚の成立の背景について探っていきたい。

## 二　『盛衰記』の特異性

『盛衰記』が『平家物語』諸本の中でも独自の作品世界を構成する、特殊な異本であることは夙に指摘されており、諸先学によってその特徴が論じられてきた[注6]。たとえば、山下宏明氏は、「物狂ノ人」とまで評されている文覚の奇矯な振舞い（巻一九）や、宗盛が実は二位尼腹の女児ととりかえられた清水寺の法橋の子であったという話（巻四三）、髑髏尼の話（巻四七）などを例として、『盛衰記』の「異常で「きたなき」世界、「物狂ひ」の世界」を指摘し、「その世界が、『平家物語』を支える集団的な想像力にはとけこまない、屈折した編者の目に由来するらしい[注7]」と述べている。

また、山下氏は別の所で、『盛衰記』の独自性が『平家物語』の世界を異化することを論じているが[注8]、南北朝期以降に編纂された『盛衰記』には、先行の『平家物語』を解釈し直すようにして成立したという特色がある。その改編の過程で、『盛衰記』には「きたなさ」を好んで語った者たちの説話が紛れ込んでおり、それが『盛衰記』の独自な世界観を構築するひとつの要因となっている。

『平家物語』を異化する『盛衰記』の「相対的」性格については、日比野和子氏[注9]、松尾葦江氏[注10]によっても指摘されてきたが、近年では、鈴木彰氏が『盛衰記』を「『平家物語』諸本論という枠から解放」することを提言し[注11]、小峯和明氏は「平家物語もどき」としての『盛衰記』の側面を指摘しており[注12]、『盛衰記』

を『平家物語』に独自の視点を加えて再構成された別種のテクストとする見方は固まりつつあるといえるだろう。

本稿で俎上に上げる巻六「西光卒塔婆事」は、本文とは独立した一字下げ記事として配置されており、『平家物語』では過分な振舞いばかりが前面に出ていた西光法師の別の側面を語ることで、西光の評価に再考を促したものといえる。この説話では、いわば悪人の西光も生前の「廻リ地蔵」の建立という功徳のため、必ず薩埵の済度に預かるはずだと、西光の後世の安楽を約束している。『盛衰記』は、西光が清盛に悪口して処刑される場面でも、「終ニ切ラル、者故ニヨクコソ云タレ。（西光は作為をもって言ったわけでなく、本当のことを言ったまでだ）」（巻六）と、西光を擁護する巷の声を載せており、西光に対して好意的な側面を持っている。

地蔵安置場所とされた七所は、いずれも洛内と洛外を結ぶ地点にある。『盛衰記』の特異性と七所の場所性との関連を示す例として、巻四七「髑髏尼御前」[注13]が挙げられる。髑髏尼の話は諸本の中でも、長門本、延慶本、八坂流諸本の城一本、『盛衰記』の四本に見られるが、注目したいのは髑髏尼が得度する場所が、長門本、延慶本では大原来迎院であるのに対し、『盛衰記』では蓮台野の地蔵堂に変更されている点である。

女房現心モナクシテ、「コハイカニト云フ事ゾ。此ヲバイヅコト申ス所ニテ侍ゾ」ト宣ケレバ、上人、「此ハ蓮台野ト申テ、亡キ人ヲ送ル鳥辺野也。タマ〳〵アル者ハ死人ノ骸、草深フシテ露滋シ。イブセク奇シキ所也」ト答ヘ給フ。（中略）ヤ、暫クアリテ女房、「サラバコ、ニテ様ヲ替ヘバヤ」ト宣ヘバ、上人、「ソレハサルベキ御事ニモ侍ルベシ」トテ、蓮台野ニ池坊ト云所アリ、其ノ傍ニ地蔵堂ト云御堂ニ具足シ入レ奉テ、傍ノ庵室ヨリ剃刀ヲ借リ寄テ、持チ給ヘル水瓶ニテ髪ヲ洗ヒ、長ニ余レル簪ヲオロシ奉ル。落ル涙、髪ノシヅク、露ヲ垂レテゾ諍ヒケル。[注14]

ここで舞台を蓮台野に改変したのは西光地蔵建立譚を意識してのものと考えられるが、葬送地である蓮台野を背景に置くことで、独自の凄惨な光景が生まれている。

また、巻四四「癩人法師口説言」では、宗盛以下の壇ノ浦に敗れて生捕りにされた者たちが、見物人が取り囲むなか、鳥羽造道を通って京へと帰還する場面で、この地の癩人法師の挿話が加えられている。

其中ニ鳥羽ノ里ノ北、造リ道ノ南ノ末ニ、溝ヲ隔テ、白キ帯ニテ頭ヲカラゲ、柿ノ着物ニ中結ヒテ朽杖ナド突イテ十余人別ニ並居タリ。乞者ノ癩人法師共也。[注15]

そして、癩人法師は、平家の凋落と自らの宿業を重ねて、道理に背いた者の命運を滔々と語ってゆく。見物人の群衆の中に、怪しげな物乞いの癩人法師を紛れ込ませる『盛衰記』の趣向は、鳥羽造道という地に不穏なイメージを抱かせずにおかない。

七所は「七道ノ辻」とされるだけあって、いずれも交通の要衝にあたるが、なかでも木幡、造道、西七条、四宮河原には、朝廷によって率分関（率分所）が置かれていた。率分関とは、中世に朝廷が各官庁に命じて設置・運営させた官営の関所で、

ここでの収益は、長官を務める公家の収入源であるだけでなく、戦禍を被った内裏などの再建費用にもあてられていた。率分関の置かれた地は、交通上とりわけ重要性の高い場所であり、流通の要となっていた。これらの地には、すなわち市が立ち、物乞いをする下層民の巣窟でもあったと考えられる。鳥羽造道の癩人法師の語りは、そのまま、この地で活動していた下級芸能民の語りと重ね合わされるのである。

## 三　七所の特性

以下、七所それぞれの特性をみていきたい。西光地蔵建立譚の七所の検証は、すでに磯村有紀子氏[注16]、竹内光浩氏[注17]によって〈境界〉という観点から検討が加えられている。また、個別の地について詳細な検証も行われているが、ここでは、『盛衰記』の西光地蔵建立譚で、これらの七所が選ばれた必然性という観点から、七所の特徴を捉えなおしてゆきたい。

**四宮河原**　四宮河原に「袖くらべ」という商人が市を開いていたことは『宇治拾遺物語』巻五「四宮河原地蔵事」にみえる。この説話で「下種（げす）」が彫像したとされる地蔵像が実際に四宮河原に祀られていたかどうかは不明だが、四宮河原は〈境界〉の土地として宿神、道祖神と習合した地蔵信仰の根づく素地が認められ、とくに宿神を祭祀した琵琶法師との関わりが注目される。[注18]四宮河原は琵琶法師の職祖とされた蟬丸ゆかりの地とされ、『平家物語』巻一〇には、「四宮河原になりぬれば、こゝはむかし、延喜第四の王子蟬丸の関の嵐に心をすまし、琵琶をひき給ひしに」[注19]とある。また鎌倉期の『東関紀行』は、「ある人のいはく、「蟬丸は延喜第四の宮にてましまし故に、この関のあたりを、四の宮と名づけたり」といへり」[注20]と四宮河原の名称が延喜帝第四皇子の蟬丸に由来するという説を挙げており、四宮河原は鎌倉期から逢坂山に準ずる琵琶法師の拠点であった。近世に至ると、四宮河原の琵琶法師によって、この地の地蔵信仰が継承されていたということは、当道座の由来を記した『当道要集』[注21]に、

> 徳林庵の南惣門の両脇に地蔵堂有此地蔵ハ定朝の作也御頭にハ小野の篁卿の作り給へる一寸八分地蔵尊を納め奉ると地蔵伝記に見えたり昔山科の四ツの辻にまし〳〵けるを保元年中に西光法師御堂を建立して入れ奉る

とあることからも推察される。徳林庵は〈六地蔵巡り〉の巡礼地であるが、『当道要集』では、蟬丸に代えて琵琶法師の職祖とされた仁明天皇第四皇子人康（さねやす）親王がその開基とされている。ここでは、小野篁と西光がともに登場し、『盛衰記』と『六地蔵縁起』の説話を受容する形で、地蔵の由来譚が語られており、地蔵安置説話の形成・伝承に琵琶法師が関わった痕跡が窺える。

**木幡**　西光地蔵建立譚の七所の中でも木幡はとりわけ注目される土地である。現在でも六地蔵という地名が名を留めているように木幡は古くから地蔵信仰の盛んな土地であった。六地蔵という地名は、貞治六年（一三六七）撰の『新札往来』が初見と考えられるが、鎌倉期の荘園図[注22]に、すでにこの地に地蔵堂が置

かれていることが確認でき、六地蔵の地名はそれに由来するものであろう。

しかし、重要なのは木幡が西光法師の勢力基盤であったと推察されることである。『百錬抄』承安三年（一一七三）三月一〇日条には、「西光法師供二養木幡堂一。月卿雲客向訪。有二舞楽一。世称二過差一」[注23]とあって、『盛衰記』の西光地蔵安置譚はある程度の史実性を孕んだものとも考えられるのである。[注24]同年同日の『玉葉』[注25]には、

今日、伺二候院一之入道法師、（名西光、左衛門尉入道也、故信西乳母子云々）浄妙寺領立レ堂、令二供養一云々、可二弾指一之世也、導師三井寺前大僧正、依二院宣一被レ請云々、

とあり、西光の堂供養が浄妙寺領内での落慶供養であったことがわかる。この事件によって、西光は世間から「過差」と非難され、九条兼実も「可二弾指一之世也」と不快を示している。浄妙寺は、寛弘二年（一〇〇五）、藤原道長が家流の正統性を誇示するために、流祖と仰ぐ藤原基経の葬地木幡に建立した藤原摂関家の菩提寺である。[注26]しかし、藤原摂関家による浄妙寺の繁栄は、保元の乱以降の家流の分裂とともに弱体化し、建久三年（一一九二）には後白河院によって聖護院宮静恵法親王が浄妙寺別当に補任され、藤原氏の手を離れることになる。承安三年の西光の堂供養は、西山恵子氏の言葉を借りれば、「藤原氏の聖域とも呼ぶべき場所に院政の風が吹き込んできた」[注27]象徴的な事件として都人の眼に映ったことであろう。

また『盛衰記』で西光が名づけた「廻リ地蔵」という呼称は、『勘仲記』弘安元年（一二七八）一〇月二〇日条では、[注28]

殿下今日平等院所令供奉也、明日春日御幸次入平等院料為御参会也、殿下前殿御同車、大納言殿并女房御同車、殿上人宗実朝臣、公頼朝臣、予、諸大夫業行朝臣、時方、隆泰等前行御車前、予於中途馬違乱遅参、於廻地蔵以南所馳参也、午剋着御、

と、固有名詞的に使用されている。ここで勘解由小路兼仲らが宇治平等院への参詣の途中に通過した「廻地蔵」が木幡を指していることは、『看聞御記』永享元年（一四二九）九月二一日条に「木幡廻地蔵」との呼称が使われていることから推定することができる。『勘仲記』の記事は、『盛衰記』の成立以前に木幡には廻地蔵と呼ばれる地蔵堂が存在したことを示している。西光が木幡に建立したのが、この地蔵堂であることを確定することはできない。しかし、『盛衰記』の西光地蔵建立譚は、西光ゆかりの地として木幡の廻地蔵に伝わっていた伝承をもとに生成された可能性が高いと考えられるのである。[注29]

また、木幡は四宮河原と同じく、琵琶法師の拠点となっていた土地である。管弦の名手として知られる源博雅が、盲の法師（多くは蟬丸）から琵琶の秘曲を伝授されたという話は、『江談抄』巻三、『今昔物語集』巻二四―二二など複数伝わっていて有名であるが、鎌倉期の『世継物語』では、[注30]

今は昔、博雅の三位といひける人は、えもいはぬ琵琶の上手なり。また童にて幼くおはしけるに、木幡とかやに目つぶれたる法師の世に怪しげなるに、琵琶は習ひ給ひけり。

と、木幡の盲法師から秘曲を伝授されることになっている。ほとんどの博雅蟬丸譚では逢坂山の盲法師とするのが一般であり、例外は、『世継物語』の木幡と、『平家物語』巻一〇『盛衰記』巻四五の四宮河原だけである。『世継物語』の記述に琵琶法師が活動していた鎌倉期の木幡の状況が反映されていることは間違いなく、彼らがこの地の西光伝説の伝承者となっていた可能性が考えられる。

**造道**　鳥羽造道は『庭訓往来』に「鳥羽白河の車借」とあるように交通業者が集住し、南都にまで勢力を伸ばした「鳥羽米商人」がいたことでも知られ[注31]、商業的な発展を遂げていた。永享四年（一四三二）には女猿楽勧進も行われている[注32]。

〈六地蔵巡り〉の巡礼地である上鳥羽の浄禅寺は文覚の開基とされ、恋塚浄禅寺とも称して、寺内には文覚が袈裟御前の首を埋めた「恋塚」が残されている[注33]。横恋慕の末に懸想人の袈裟を誤って殺してしまう文覚（遠藤盛遠）の発心譚は有名である。袈裟は延慶本と四部合戦状本でも鳥羽ゆかりの人物とされているが、御伽草子『恋塚物語』（明暦頃刊本）では袈裟の首を捨てた場所として鳥羽の恋塚が語られるようになる。鳥羽の恋塚は、能『卒塔婆小町』や『閑吟集』に、すでに詞章に読まれているが、近世には近松門左衛門によって浄瑠璃『鳥羽恋塚物語』（延宝九年六月以前）が作られるなど極めて有名であった。鳥羽にはもう一つ、下鳥羽の利剣山恋塚寺にも恋塚伝承が残されているが、浄禅寺と恋塚寺はともに浄土宗に属しており、『恋塚物語』では恋敵の刑部左衛門が法然に師事して出家することにもなっている。そのため、浄土宗との関係の深さが想像され、小林美和氏は、恋塚伝承の背景に鳥羽を中心とする浄土宗派の唱導があると指摘している[注34]。浄禅寺の北には同じく浄土宗の誓祐寺があるが、この寺は苅萱堂（かやんどう）と通称され苅萱伝承を有していることで知られている。『拾遺都名所図会』（天明七年刊）によると、誓祐寺は苅萱道心が円空立信とともに比叡山に登り、下山後、高野山に登るまでの三、四年間、庵を結んで蟄居した旧跡であるという。これらの寺は、宗祖とされるような高僧ではなく、文覚や苅萱という伝承上の人物が開基に据えられており、創建の経緯も不明で胡乱な印象が抜きがたい。中世末期に下級芸能民の活動していた辻堂だった可能性が高いと思われる。

**西七条**　西七条は、平安期には京城の境界地として疫神祭が修せられた記録もあり[注35]、山陰・山陽道へ抜ける京の出入り口として古くから認識されていた。平安末期には「西七条刀禰」の存在が確認され[注36]、この地に鍛冶・鋳物師・金物細工師などの職人が集住していたことはよく知られている[注37]。

西七条という呼称は、七条大路の西側一帯を広く指して呼んだもので、『盛衰記』が、具体的にどの地点を指して「西七条」としているのかは判然としない。この附近では、朱雀大路と七条大路の交叉する七条朱雀に、『太平記』巻八にみえる「朱雀ノ地蔵堂」があったと考えられ、西光の「廻リ地蔵」はここに擬せられている可能性が高い。七条朱雀は、七条大路の西側の中でもとりわけ重要な出入り口として機能しており、同時に境界鎮護の場所として重視されていた。保元の乱で子義朝によっ

て処刑された源為義の最期の地は、『保元物語』では「七条朱雀」とされているが、[注38] 山口泰子氏は、この為義最期譚の生成・伝承に境界鎮護のために地蔵信仰を担った七条朱雀の巫祝唱導者、とくに時衆四条派の関与があったと論じている。[注39] 少々長くなるが山口氏の論を紹介すると、『太平記』の「朱雀ノ地蔵堂」は、『さんせう太夫』で厨子王丸がお聖さまの助けで丹後から逃げ延びてきた「西の七条朱雀、権現堂」（現在の浄土宗清光山成就院権現寺、以下、朱雀権現堂）のことであるという。朱雀権現堂の本尊が勝軍地蔵であったことから、「朱雀ノ地蔵堂」と朱雀権現堂を同一と見做すのは、近世前期の同寺の縁起[注40]や『山城名勝志』（正徳元年刊）でも行われており、また岩崎武夫氏や竹内光浩氏によっても説かれている。[注41] そして、山口氏は、朱雀権現堂が近世の地誌類で「祇陀林寺」を正式な寺名としていることに注目する。祇陀林寺は中御門京極にあった天台宗の寺で、『続古事談』第四によると、左大臣源融の邸宅に融の子の仁康上人が祀った釈迦如来を藤原顕光の邸宅に移して広幡院と号し、後に源信が祇陀林寺と改名したものだという。顕光は道長との政争に敗れて怨霊となった、悪霊左府として名高い。また、『今昔物語集』巻一七―一〇では、祇陀林寺で疫病祓いのための地蔵講が修せられており、祇陀林寺は釈迦如来だけでなく地蔵霊場としても有名であった。しかし、やがて中御門京極の祇陀林寺は所在が確認できなくなる。それが、中世後期になると、祇陀林寺は四条京極に移って、金蓮寺となったという説が広まってゆく。金蓮寺は四条道場の異称で、浄阿真観を祖とする時衆四条派の拠点である。つまり、山口氏は、時衆四条派によって継承された祇陀林寺の地蔵信仰が、境界鎮護・怨霊鎮魂というゆかりによって朱雀権現堂に持ち込まれ、為義最期譚の生成・伝承する基盤になったと論じているのである。なお、西光が処刑された場所は『愚昧記』では「五条坊門朱雀」、覚一本では「五条西朱雀」とされているが、『愚管抄』や読本系平家物語では単に「朱雀ノ大路」「朱雀大路」などとされており、七条朱雀ともそう遠くはないが、今のところ為義最期譚との関連は不明である。

先の文覚発心譚においても、『恋塚物語』に至っては、袈裟を見初めた盛遠（文覚）が邂逅の機会を伺って西七条に住む袈裟の母の尼に奉公することになっており、西七条の地が物語の舞台に浮上している。七条朱雀や西七条には下級芸能民の活動の痕跡が極めて豊富である。

**蓮台野**　蓮台野は、東山の鳥辺野、嵯峨の化野とならぶ葬送の地として知られる。平安期には紫野の一部として認識されていたが、平安末期には蓮台野の地名が成立し、本格的な葬送の地として認知されていった。[注42] 蓮台野の葬送の様子を伝える文献は多く、葬送地であるという特徴から、この地では地蔵信仰が盛んであったものと考えられる。[注43] 永仁三年（一二九五）成立の『野守鏡』には、[注44]

これよりかの法衆（二十五三昧会の源信ら――引用者）をの〳〵みな順次の往生をとげられえいざんのみねに紫雲つねにたな引。蓮台野の定覚上人これをうらやみて。又を

こなひ侍りけるに。蓮花化生したりければ。結界して此所にて墓をしめん人をばかならず引摂せんと発願をしたりけるより。蓮台野となづけて一切の人の墓所となれり。

と蓮台野の起こりを記した一文がある。定覚上人は、康略元年（一三七九）に鋳造された千本閻魔堂の銅鐘の銘文で、閻魔堂の開基とされている人物である。千本閻魔堂は、壬生寺、嵯峨清涼寺とともに大念仏狂言で名高く、狩野永徳筆「上杉本洛中洛外図屏風」に閻魔堂の大念仏狂言が描かれていることはよく知られている。山路興造氏によれば、これらの寺では大念仏以外にも猿楽や曲舞の上演が行われ、「庶民の娯楽センター的な役割」を担っていた。[注45] また、蓮台野には、鎌倉期には非人が集住し、葬送に携わっていたものと考えられているが、[注46] 室町期になると京都の人口増加に伴い、周辺には人家が増加し、多くの墓所が破棄されている。[注47] 大念仏会・大念仏狂言の隆盛には蓮台野の葬送地という歴史的な特性と、周辺の居住環境の変化が関係していると考えられる。

**ミゾロ池**　ミゾロ池は「美曾呂池」「御菩薩池」「深泥池」などと表記し、『梁塵秘抄』に「何れか貴船へ参る道、賀茂川　箕里御菩薩池」[注48] とあるように、鞍馬寺、貴船神社への参詣路にあたっている。ミゾロ池は、『今昔物語集』巻一九―六に「美度呂池コソ人離タル所ナレ」[注49] と言われているように、どこか人煙まれな荒涼とした雰囲気が漂っている。天文元年（一五三二）成立の『塵添壒嚢鈔』第三―六一には、「鞍馬ノ奥僧正カ谷。美曾路池ノ端ノ方丈ノ穴ニ住ケル。藍婆惣主ト云。二頭ノ鬼神共ニ出テ。都ヘ乱レ入ントシケルヲ」[注50] とミゾロ池の鬼伝承を記されている。また、説経「小栗判官」には、冒頭近くミゾロ池の大蛇が登場する。なかなか正室が決まらない小栗は、鞍馬寺に願をかけに向かう途中、漢竹の横笛を吹き鳴らす。[注51]

深泥池の大蛇は、この笛の音を聞き申し、「あら面白の笛の音や。この笛の男の子を、一目拝まばや」と思ひつつ、十六丈の大蛇は、二十丈に伸び上がり、小栗殿を拝み申し、あらいつくしの男の子や。あの男の子と、一夜の契りをこめばやと思ひつつ、年のよはひ数ふれば、十六・七の美人の姫と身を変じ、鞍馬の一のきざはしに、由有り顔にて立ち居たる。

小栗は美女に変身した大蛇と契を結んでしまい、父に咎められて常陸へ配流されることになる。井上満郎氏は、これらミゾロ池に住む「鬼神」ともいうべきものへの信仰の根底には、水神を祀る貴船神社へ通じるこの地の人々に、池の水神への畏れがあったと述べているが、[注52] 喧噪から離れてひっそりと水を湛えているミゾロ池は、不気味な印象を喚起させたに違いない。そして、この地に早くから地蔵堂が建立されていたことは、宝徳三年（一四五一）の検地帳によって確認できる。[注53] ミゾロ池は、西光地蔵建立譚の他の六所とは異質な荒涼とした場所であるが、早くから地蔵霊場として知られていたことが要因となって七所の一つに選択されたものと考えられる。

**西坂本**　西坂本は雲母坂（きららざか）を通じて比叡山への玄関口に当たる地で、現在の修学院から一乗寺附近を想定したものと考えられる。

梵舜本『沙石集』巻四―一に、三井寺の慶祚が「山ノ西坂本ノ人宿ノ地蔵堂ノ柱」[注54]に文を記したという挿話が挙げられており、登山口の地蔵堂は旅宿としても使われていたようだ。また、『康富記』嘉吉三年（一四四三）五月二八日条に「於水飲地蔵堂有駄餉」とあり、雲母坂を登りきったところにある水飲の地蔵堂が休憩所となっている。だが、これらよりも古く西坂本の地蔵信仰の存在を示唆する記事として、第二種七巻本系『宝物集』巻四の身代わり地蔵譚がある。「西坂本の観音院と云ところ」のほとりに住む老女に代わって地蔵が田植えをしたというものであるが、ここでの「西坂本の観音院」は岩倉の大雲寺観音院とされるのが通例である。[注55] しかし、『梁塵秘抄』の第三一二歌には、[注56]

根本中堂へ参る道、賀茂河は河広し　観音院の下り松、実らぬ柿の木人宿　禅師坂、滑石水飲四郎坂　雲母谷、大嶽蛇の池、阿古也の聖が立てたりし千本の卒塔婆

とあり、ここでの比叡山への参詣路に位置する「観音院の下り松」が大雲寺を指しているとは考え難い。古くは下り松のある一乗寺附近にも観音院と呼ばれる寺院が存在しており、[注57]『宝物集』の「西坂本の観音院」も、そちらを指していたものと考えられるのである。いずれにせよ、雲母坂下の西坂本周辺には、比叡山への経由地として早くから地蔵信仰が根づく基盤のあったことは確かだろう。西坂本はミゾロ池と同じく、有名な地蔵霊場だったことから七所に選択された土地であろう。なお、『看聞御記』応永二六年（一四一九）一一月一七日条には「坂本有レ鬼、夜々人を損、見レ之物則死云々」とあり、西坂本はミゾロ池と同じく鬼が出ると噂されている。

## 四　まとめ

以上、七所の特性を検証した。ここから指摘できるのは、西坂本を除いて、これらの地には共通して芸能民の活動の痕跡が確認できるということである。

琵琶法師と深い関係にある四宮河原・木幡、説経節に登場する西七条・ミゾロ池、髑髏尼説話や文覚発心譚という極めて唱導的要素の濃い説話に現れる鳥羽造道・蓮台野。なかには、鳥羽の恋塚伝承のように、説話から発展した伝承が当地に史跡として残されている例もある。これらの伝承は、大寺院を離れて京都の周縁的な土地で活動した、下級宗教民の芸能化した唱導活動との関係の中で生まれてきたものである。

髑髏尼説話や文覚発心譚、鳥羽の癩人法師といった説話は、『平家物語』諸本の中で特異な位置にある『盛衰記』の中でも、唱導的な背景を色濃く残しているという点において特徴的な説話群であるが、愛別離苦と恩愛の情を強調し、聴衆の涙を誘うこれらの説話は、説経節の世界と響き合うものがある。それは単に内容的に通底するというだけに止まらず、西光地蔵建立譚の七所の特性を顧慮すれば、生成・伝承の基盤となった土地についても一定の共通性を指摘できるのではないだろうか。とりわけ多くの伝承を残す西七条や鳥羽造道は、両者共通の母体として機能していた辻堂の所在地として捉えることができる。

また、西光地蔵建立譚で地蔵が安置された七所は、早い段階から地蔵信仰が根づいていたことが確認できるが、境界性に由来する七所の地蔵信仰は、説話の成立に先行して行われていたものと考えられる。とりわけ、ミゾロ池と西坂本は地蔵霊場であったことが主な選択要因だったと言えるだろう。

『盛衰記』が、この七所を地蔵安置場所として選択したのは、既存の地蔵堂に西光の開基譚を附会する意図が働いていたはずである。そのなかで注目されるのが木幡である。承安三年に西光が堂供養を行ったのが木幡の地蔵堂であったかは判断できないが、以後も木幡には西光の伝説が継承されていたはずである。鎌倉期には「廻地蔵」と呼びならわされていた木幡の地蔵堂の伝承を発展させて成立したものが『盛衰記』の西光地蔵建立譚だったのではなかろうか。

「廻リ地蔵」とその地蔵道場を西光が命名したことになったのも、木幡の「廻地蔵」に由来している。後に、西光地蔵建立譚は、開基を西光から小野篁に代えて、〈六地蔵巡り〉の由来を示した『六地蔵縁起』へと発展してゆくが、その際に主導的な役割を担ったのも木幡の大善寺だった。西光と小野篁という二人には、直接的な関連性を見出すのは難しいが、「はて、後も手には日記を捧げ、口には筆をふくみ、琰魔の庁にても、第三の冥官に列りけるとぞ承る」（四類本『平治物語』）と噂された信西を結節点とすれば、両者は容易に結びつき得るのである。[注58] 西光地蔵建立譚の七所、あるいは〈六地蔵巡り〉の六所には、木幡の地蔵堂を中心とした京都周縁の地蔵霊場のネットワークが反映されている。

注

1 真鍋広済他編『地蔵霊験記絵詞集』（古典文庫、一九五七年）

2 市古貞次他校注『中世の文学　源平盛衰記　1』（三弥井書店、一九九一年）

3 真鍋広済「六地蔵めぐり攷」（『仏教と民俗』1、一九五七年）、高橋渉「京都の「六地蔵参り」」（『宮城学院女子大学研究論文集』55、一九八一年）、森成元「近世の地蔵信仰 ―特に京・大坂を中心として―」（真野俊和編『講座日本の巡礼1本尊巡礼』雄山閣、一九九六年）他

4 浜畑圭吾「西光廻地蔵安置説話の生成」（福田晃他編『唱導文学研究8』三弥井書店、二〇一一年）、同「西光と地蔵菩薩 ―神宮文庫本『沙石集』の生成―」（大取一馬編『典籍と史料』思文閣出版、二〇一一年）

5 山下宏明「源平盛衰記の語り」（『國學院雑誌』103-5、二〇〇二年）に同様の指摘がある。

6 松尾葦江氏をはじめ服部幸造氏、砂川博氏、美濃部重克氏、山中美佳氏、井上翠氏などの論考がある。

7 山下宏明「『源平盛衰記』と『平家物語』」（『平家物語の生成』明治書院、一九八四年）四六五項

8 前掲（5）論文

9 日比野和子「源平盛衰記の一性格 ―「とりどり」とい

う表現をめぐって―」（『名古屋大学国語国文学』43、一九七八年）

10 松尾葦江「源平盛衰記の意図と方法 ―中世文学の〈時〉と〈場〉の問題から―」（『平家物語論究』明治書院、一九八五年）

11 鈴木彰「〈頼朝鎌倉入り〉の意義づけ ―『平家物語』から『源平盛衰記』へ―」（『平家物語の展開と中世社会』汲古書院、二〇〇六年）三〇六項

12 小峯和明「聖地と願文・表白 ―『平家物語』の厳島参詣」（『中世法会文芸論』笠間書院、二〇〇九年）五〇六項

13 髑髏の尼については、渡辺卓磨「『盛衰記』髑髏尼説話考 ―語りの場ということについて―」（『文芸論叢（大谷大学）』12、一九七九年）、名波弘彰「『平家物語』髑髏尼説話考」（『文芸言語研究（文芸篇）』28、一九九五年）、西川学「『源平盛衰記』髑髏尼説話について ―観音巡礼を中心に」（『奈良教育大学国文研究と教育』24、二〇〇一年）他

14 本文は渥美かをる解説『慶長古活字版 源平盛衰記 6』（勉誠社、一九七八年）に依るが、水原一考定『新定 源平盛衰記 6』（新人物往来社、一九九一年）を適宜参照した。

15 （14）に同じ。

16 磯村有紀子「中世の京都と六地蔵」（『滋賀史学会誌』8、一九九四年）

17 竹内光浩「平安京庶民信仰の場」（戸田芳実編『中世の生活空間』有斐閣、一九九三年）

18 四宮河原と琵琶法師の関係については、矢代和夫「蟬丸の一族」（『境の神々の物語』新読書社、一九七一年）、田中久夫「地蔵・盲僧・小野氏」（『仏教民俗と祖先祭祀』神戸女子大学東西文化研究所、一九八六年）、松田存「四ノ宮河原抄考―謡曲「蟬丸」をめぐって―」（『三松』8、一九九四年）、兵藤裕己「当道祖神伝承考」（『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館、二〇〇一年）他

19 高木市之助他校注『日本古典文学大系 平家物語 上』（岩波書店、一九六〇年）

20 長崎健他校注・訳『新編日本古典文学全集 中世日記紀行集』（小学館、一九九四）

21 『新訂増補 史籍集覧 30』（臨川書店、一九六七）

22 『山城国山科郷古図』（西岡虎之助編『日本荘園絵図集成上』東京堂出版、一九七六年）

23 『新訂増補國史大系11 日本紀略・百錬抄』（吉川弘文館、一九六五年）

24 山路興造氏は『百錬抄』の記事から西光地蔵安置譚が史実である可能性を指摘している。（同「京都の盆行事 ―その歴史的考察―」『京都 芸能と民俗の文化史』思文閣出版、二〇〇九年）

25 『玉葉』（国書刊行会、一九七一年）

26 林屋辰三郎「藤原道長の浄妙寺に就いて」（『古代国家の

解体』東京大学出版会、一九五五年）、田中久夫「文献にあらわれた墓所 ―平安時代の京都を中心として―」（森浩一編『日本古代文化の探究・墓所』社会思想社、一九七五年）他

27 西山恵子「藤原氏と浄妙寺」（『京都市歴史資料館紀要』10、一九九二年）一〇三項

28 『増補史料大成 勘仲記』（臨川書店、一九六五年）

29 『平治物語』では山城田原に逃れた信西の最期譚に木幡が関与するようになっており、矢代和夫氏は、前掲（18）論文で田原・木幡が信西一門の伝承基盤となっていたと指摘している。

30 白石美鈴「『世継物語』注釈（五）」（『日本女子大学紀要（文学部）』51、二〇〇二年）

31 『大乗院寺社雑事記』文明四年一〇月二六日条

32 『看聞御記』永享四年一〇月一〇日条

33 文覚の恋塚伝承については、徳田和夫「資料翻刻・紹介 恋塚寺蔵『當山略縁起』」（『軍記と語り物』17、一九八一年）、小林美和「文覚説話の展開 ―説話の変容―」（『平家物語生成論』三弥井書店、一九八六年）、橋本章彦「略縁起の平家物語 ―縁起化する文覚発心譚―」（石橋義秀他編『近世略縁起論考』和泉書店、二〇〇七年）他

34 前掲（33）小林論文 二七五項

35 『三代実録』貞観七年五月一三日条

36 『平安遺文』524

37 脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』第二章第四節（御茶の水書房、一九六九年）

38 『兵範記』保元元年（一一五七）年七月三十日条は、為義らの最期の地を「船岡辺」としている。

39 山口泰子「語り物とヒジリ ―保元物語・為義最期譚の生成基盤―」（美濃部重克他編『講座日本の伝承文学3 散文文学（物語）の世界』三弥井書店、一九九五年）

40 川嶋美貴子「史料紹介 権現寺蔵『朱雀権現堂略縁起』と『朱雀権現堂縁起』」（『文化史学』65、二〇〇九年）

41 岩崎武夫「権現堂と土車」（『さんせう太夫考・続（説教浄瑠璃の世界）』平凡社、一九七八年）、前掲（17）論文

42 山本尚友「上品蓮台寺と墓所聖について」（細川涼一編『三昧聖の研究』碩文社、二〇〇一年）

43 例えば上品蓮台寺の本尊は延命地蔵菩薩で、同寺には鎌倉末期の六地蔵図像も伝存している。

44 『群書類従』27

45 山路興造「大念仏狂言考」前掲（24）書 一五八項

46 網野義彦『中世東寺と東寺領荘園』第七章（東京大学出版会、一九七八年）

47 『吉田日次記』応永九年（一四〇二）五月二四日条に、「御墳墓之地、可為蓮台野歟之旨申入候処、彼辺已為人々宿所、墓所等多棄損」とある。

48 小林芳規他校注『新日本古典文学大系 梁塵秘抄 閑吟集

狂言歌謡』（岩波書店、一九九三）

49 小峯和明校注『新日本古典文学大系 今昔物語集 四』（岩波書店、一九九四）

50 『大日本仏教全書150 塵添壒嚢鈔』（名著普及会、一九八三年）

51 室木弥太郎校注『新潮日本古典集成 説経集』（新潮社、一九七七年）

52 井上満郎、佐藤文子「深泥池の歴史と文化 付・深泥池歴史史料集成（稿）」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』10、二〇〇五年）

53 『賀茂別雷神社文書』 翻刻は前掲（52）論文

54 渡邊綱也校注『日本古典文学大系 沙石集』（岩波書店、一九六六年）

55 山田昭全他校注『新日本古典文学大系 宝物集 閑居友 比良山古人霊託』（岩波書店、一九九三） 頭注

56 前掲（48）書

57 前掲（48）『新日本古典文学大系』の頭注は、「寺門一乗寺に観音院の穆算他が住したための呼称」としている。寺門派の穆算は観音院に供僧していたが、天元四年（九八一）、山門派と寺門派の対立の折、難を逃れて一乗寺へと移住し、一乗寺僧都と号した。（『僧網補任』他）

58 『六地蔵縁起』のもう一つの源流である「矢田地蔵縁起」からも西光と篁の接点が推察できるだろう。浜畑圭吾氏は前掲（4）論文「西光と地蔵菩薩 ―神宮文庫本『沙石集』の生成―」で、神宮本『沙石集』巻二で西光が「五条坊門」の地蔵像を造ったとする説話について、「五条坊門」の地蔵を五条坊門坊城の壬生寺のものとして論じているが、綾小路西洞院にあった矢田寺を指している可能性も考えられる。綾小路は五条坊門のひとつ北にあたる。『看聞御記』応永二四年（一四一七）四月一三日条には「抑今夜五條坊門辺有焼亡。矢田地蔵堂炎上云々」とあり、矢田寺が五条坊門と認識されていても不思議ではない。

（まつした・けんじ 博士前期課程）